

私の書いた本

2021年10月18日

太田隆次

先日、野口さんが自著を紹介され、宇宙、哲学、歴史、芸術など視野の広さと造詣の深さに改めて感じ入りました。

それに次いで今月のテーマの「本」のサワリだけですが、蛮勇を奮ってこの際、ごく簡単に書かせて頂きました。

蛇足ですが私は30代の前半3年間のアメリカ留学をはさんで、日本企業とアメリカ企業勤務を終えて62歳で定年退職後、その後は今日まで海外ビジネスと国際人事の自営コンサルタント業や物書きに携わっています。

下に紹介させて頂くのは、皆様にはなじみがないかも知れませんが、「人が行動を起こす究極の源泉は良くも悪くもその人の動機にある」という心理学者マレーの「動機論」を人事制度に体系づけたマクレランド創始の「高業績者の達成動機＝コンピテンシー」を紹介した私の本の一部です。

1) 哲学から心理学の動機論まで
万学の母である「哲学」から派生した
「心理学」の「動機論」「達成動機」に
至るまでのロードマップ。



哲学



心理学



実験心理学 (ブント, 1879)



行動の科学 (ワトソン, 1913)



動機リスト (マレー 1938)



達成動機 マクレランド1972 **コンピテンシーと命名**



2) 各人各様の動機のリスト

動機名	(英語名)	定義
1. 顕示動機	Exhibition	自己演出、他人を面白がらず、興奮させ、魅惑し、驚かせ、楽しませたい動機
2. 傷害回避動機	Harm-avoidance	苦痛、傷害、病気、危険状態から逃避したい動機
3. 養護動機	Nurturance	無力な者、弱者などを、助ける、食べさせる、保護する、看護したい動機
4. 秩序動機	Order	整然とすること、整頓、組織化、清潔、清楚、正確さを達成したい動機
5. 遊戯動機	Play	緊張を緩和し、娯楽、ゲーム、スポーツ、ダンスなど遊びに参加したい動機
6. 拒絶動機	Rejection	マイナスになることから離れる、劣等なものを見下し、排斥、追い払いたい動機
7. 依存動機	Succorance	他人の援助、支持、激励、助言、保護、同情を求め、依存したい動機
8. 理解動機	Understanding	質問、解答、理論、思索、公式化、分析、一般化したい動機
9. 屈従動機	Abasement	非難、罰、批判を受け入れる、自己を卑下する、自己を責めたい動機
10. 達成動機	Achievement	困難なことを成し遂げる、人間や思想に精通、処理し組織化する、力を発揮し、障害に打ち勝ち高い標準に達する、他人と競争し他人に勝ちたい動機、才能を使って自尊心を高めたい動機 (コンピテンシー)
11. 親和動機	Affiliation	自分の味方になる人に近づく、協力する、好意を持ち合いたい動機
12. 攻撃動機	Aggression	他人を攻撃し、報復し、傷つけ、力づくで反対、嘲笑したい動機
13. 自律動機	Autonomy	強制や束縛から逃れ、自由に独立して行動したい動機
14. 反撃動機	Counteraction	失敗を克服し、屈辱、不名誉を消したい動機
15. 防衛動機	Defendance	暴力、非難、軽視などから自己を防衛し、行為を正当化したい動機
16. 恭順動機	Deference	優越者を賛美し、支持し、追随し、喜んで仕えたい動機
17. 支配動機	Dominance	他人を支配し、他人の行動に影響を与えたい動機

3) 自著の紹介

1. 「アメリカを救った人事革命 コンピテンシー」

1999年刊。我が国初の入門書として第三刷まで売れました。

余部がありますので、もしご興味があれば差し上げますのでお知らせ下さい。

「アメリカを救った人事革命」というサブタイトルは、1960年代、「ジャパン アズ ナンバーワン」と言われたように、アメリカ企業は日本企業に押されていました。その原因のひとつが、「職務給」と称される、幾ら働いても割りつけられた職務の固定給しか支給されない制度にありました。コンピテンシー連動の賃金制度導入により達成度により賃金が上がるのでコンピテンシーを導入したアメリカ企業は再び人材競争力を取り戻しました。



2. 「日本企業の復活 コンピテンシー人事活用の仕方」

これら2, 3, 4などは、いずれもセミナーや導入企業の指導で書き足したものです。

3. 「コンピテンシー実務ハンドブック」

4. 「コンピテンシー実践活用マニュアル」 (CD-ROM) 付き



追記：

導入に際しては、経営者から第一線まで、職務や階層ごとにコンピテンシーのレベルを具体的な行動として書きますので、電話帳のように部厚くなり、「コンピテンシーディクショナリ」といいます。

内容は企業独自の門外不出扱いで、余談ですが宮本武蔵の「五輪書」、世阿弥の「風姿花伝」に相通ずる部分があると思います。